

第一次調査、第二次調査において、20年前に比較して親の養育態度が、「厳格・禁止」、「期待」、「干渉」、「不安」の傾向を強く示していたことは、注目すべき結果といえる。1994年に「エンゼルプラン」が策定されて10年が経過した。2004年8月には、総務省が、新エンゼルプランを子育ての負担感を緩和しているとは言い難い、と評価している<sup>4)</sup>。今回の調査結果を見る限りにおいて、新エンゼルプランに限らず、エンゼルプラン以降の子育て支援の効果は認められない。2005年4月からは、「子ども・子育て応援プラン」が施行されているが、子育て支援に携わる関係者は、子育て支援の方向性を再検討する必要があると考えられる。特に、親の養育態度の項目に物理的な状況よりも親の心情や他の養育態度の項目が強く関連していたということは、サービス提供の子育て支援のみならず、親自身の自尊心や、有能感、効力感などを支持していく支援が求められていると推察された。

厳格「お子さんのしていことを「あれはいけない」、「これはいけない」と禁止しますか。」と他の項目のクロス

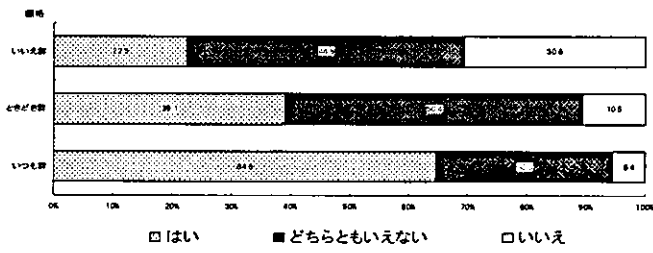


図-1 育児でいらいらすることは多いですか

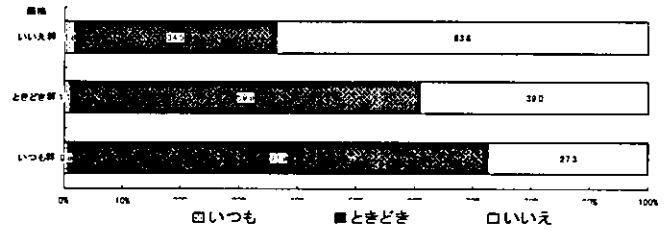


図-6 お子さんが同じことを使っているのに、あるときは死に、あるときはほめるのがしつこいですか

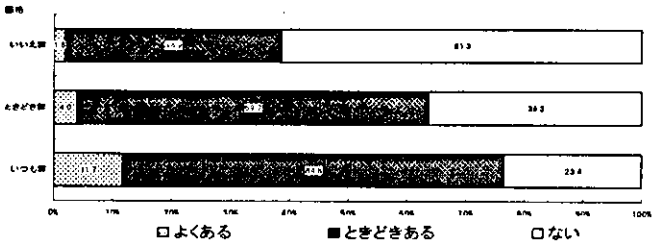


図-2 お子さんにどうかかわったらいかがい通うときがありますか

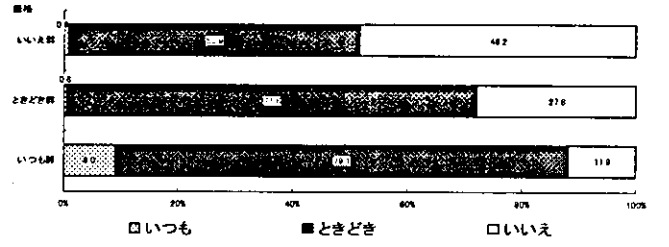


図-7 あなたはお子さんを叱るとき、たたくつねる、けるなどの体罰を用いますか

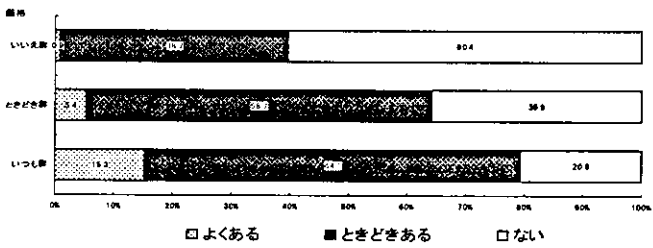


図-3 育児に自信がもてないと、感じることはありませんか

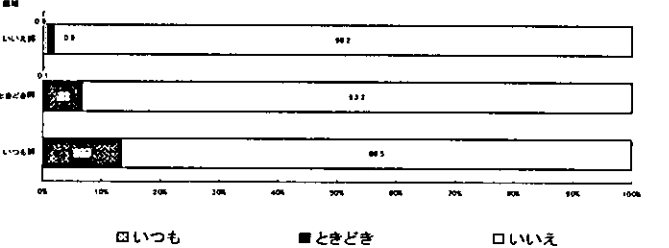


図-8 このお子さんとはなんとなく気があわないように思いますか

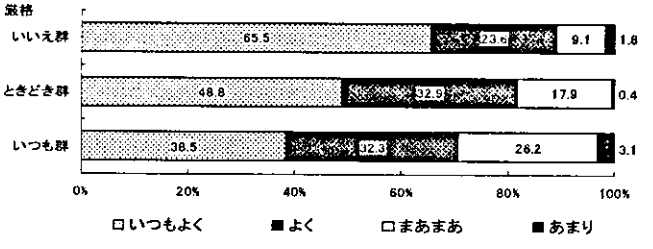


図-4 お母さんは赤ちゃんの世話をしたり遊ぶとき、話しかけますか

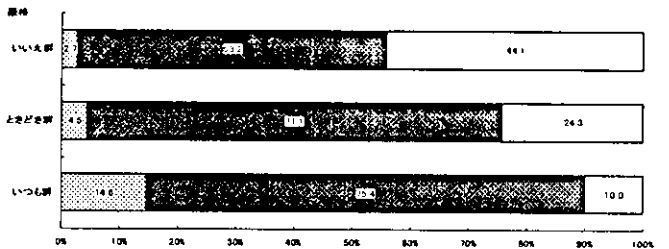


図-9 不安 育児で不安になることはありますか

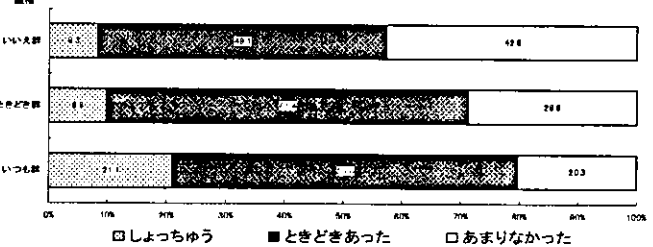


図-5 育児のことで今更で心配なことがありますか

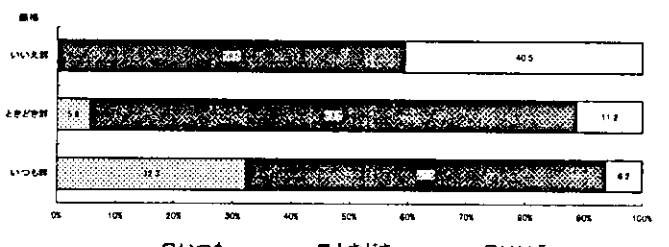


図-10 あなたはお子さんをしてのことを知っていられて、口出ししますか

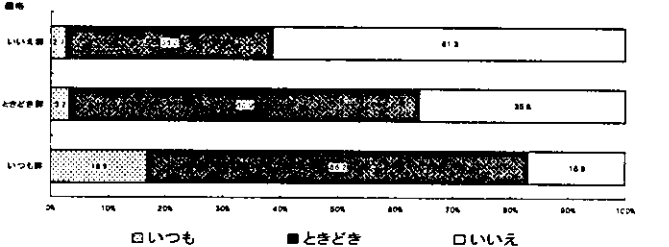
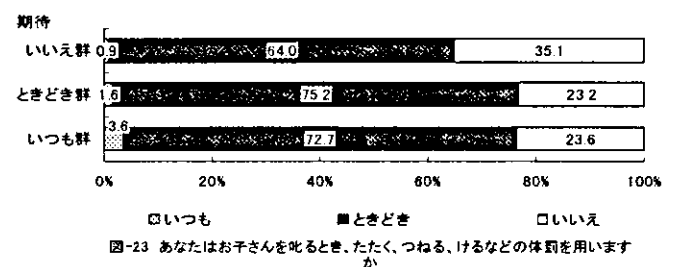
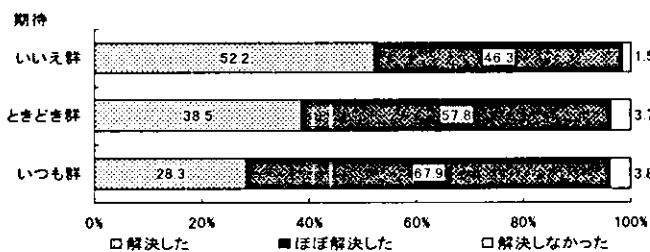
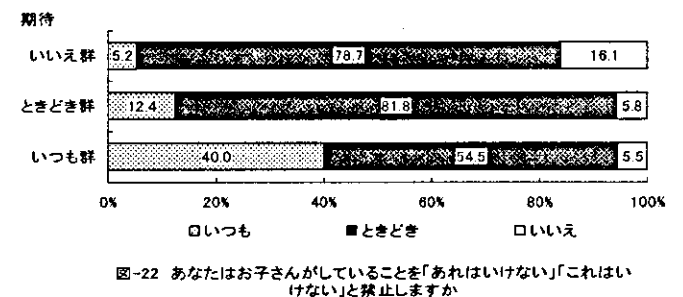
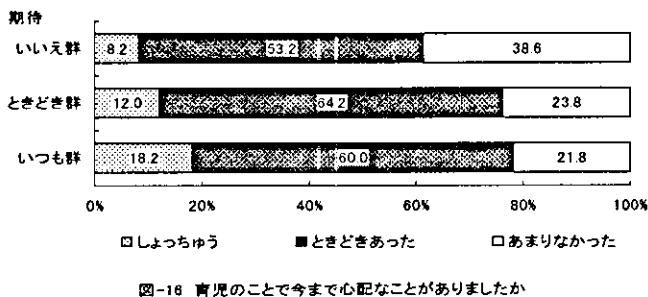
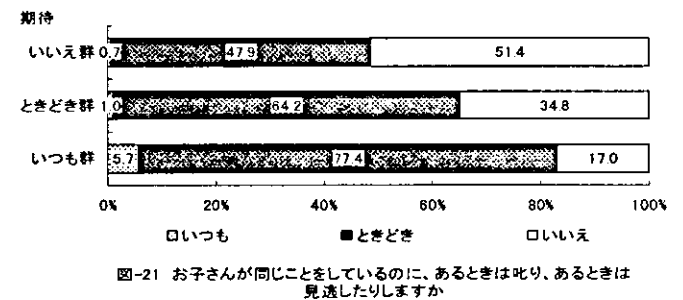
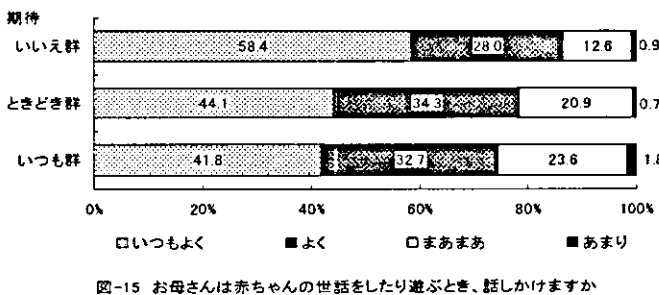
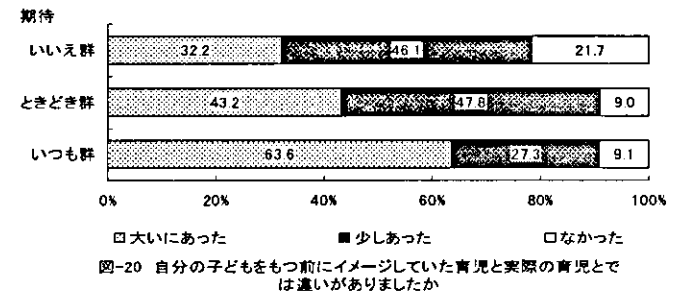
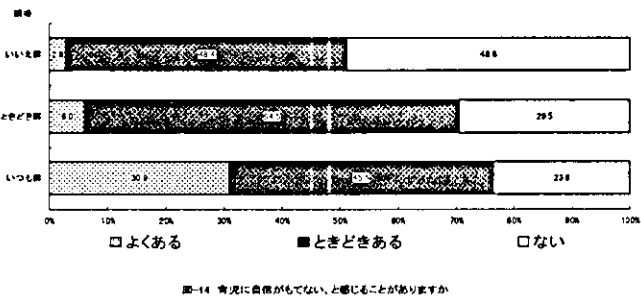
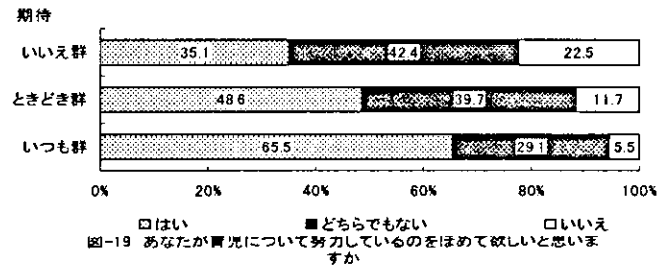
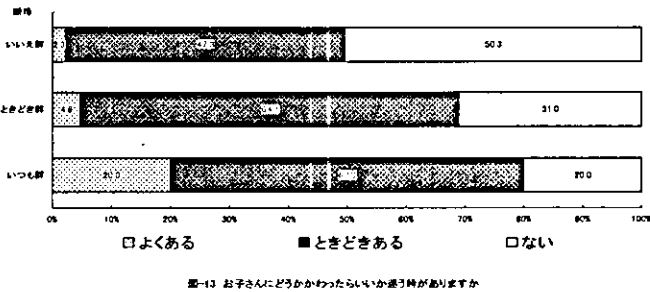
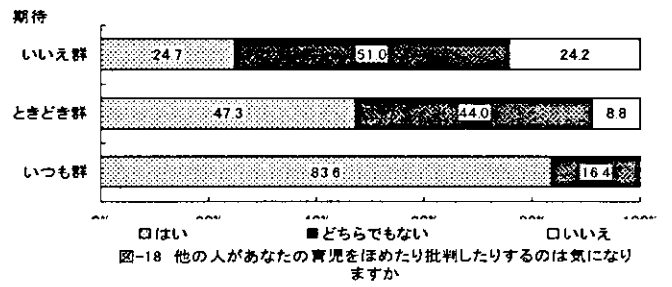
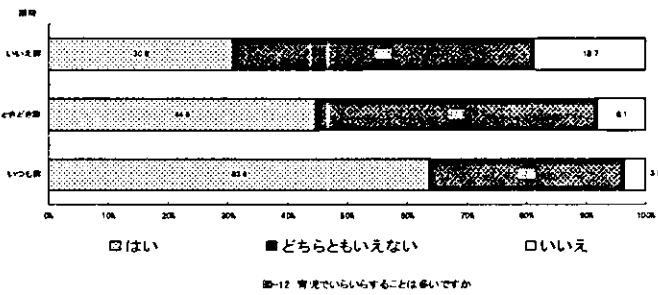


図-11 お子さんをおよそのお子さんと比較して見ることは多いですか

期待「お子さんをよそのお子さんと比較して見ることは多いですか」と他項目のクロス



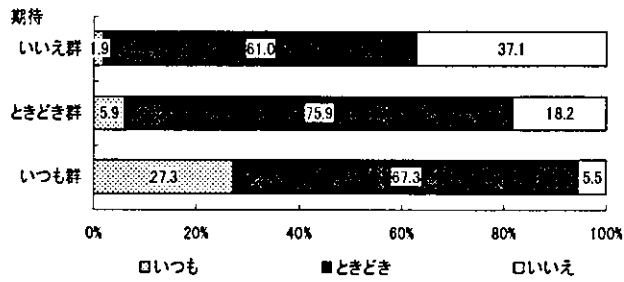


図-24 育児で不安になることはありますか

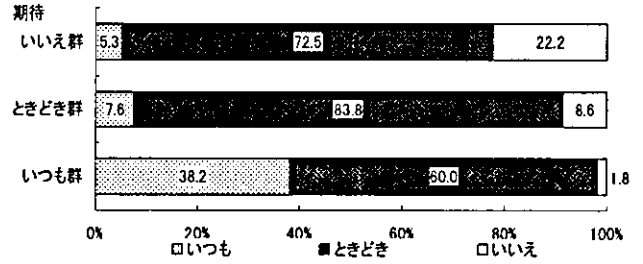


図-25 あなたはお子さんがしていることを黙って見ていられなくて口出しますか

干渉「あなたはお子さんがしていることを黙って見ていられなくて口出しますか」と他項目のクロス

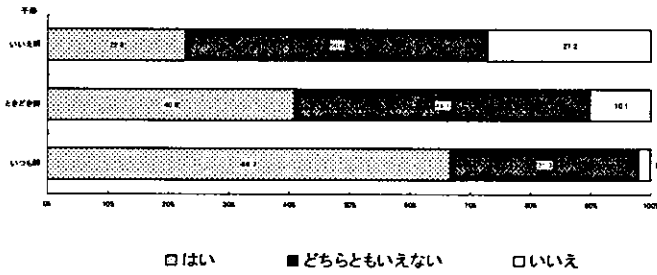


図-26 育児でいらいらすることは多いですか

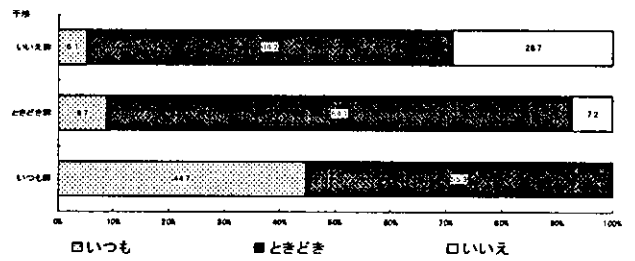


図-26 あなたはお子さんに対してあれこれと口出ししていませんか

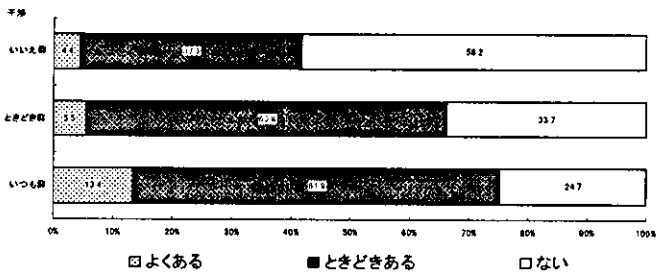


図-27 育児に自信がもてないと感じることがありますか

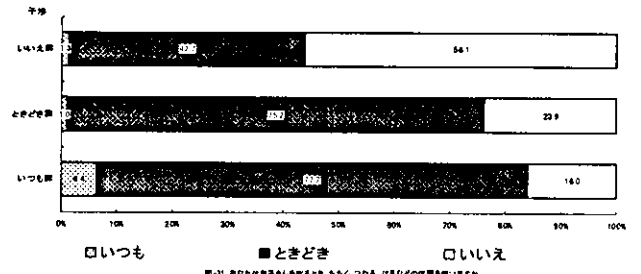


図-27 あなたはお子さんに対してあれこれと口出ししていませんか

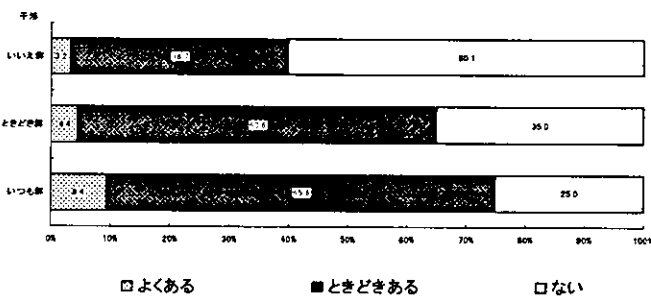


図-28 お子さん同じことをするのに、あるときは叱り、ある時は見過したりしますか

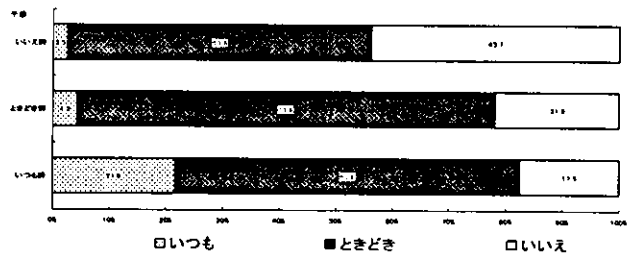


図-28 育児で不安になることはありますか

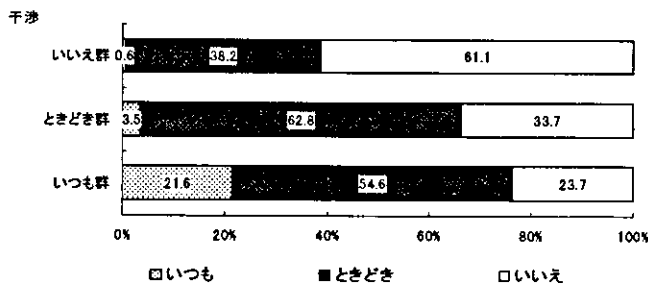


図-29 お子さんをよそのおさんと比較して見ることが多いですか

不安「育児で不安になることはありますか」と他項目のクロス

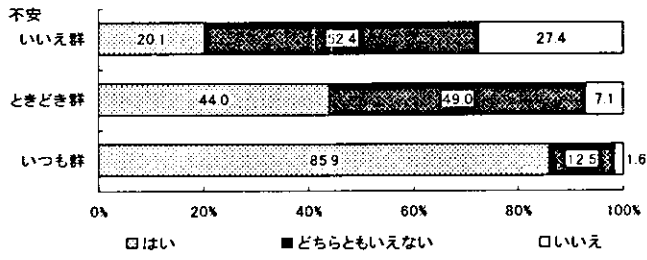


図-33 育児でいららすることは多いですか

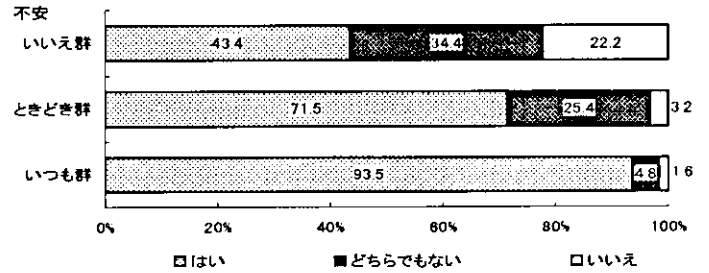


図-39 子育てを大変と感じますか

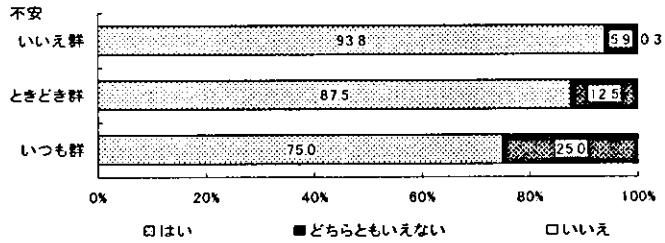


図-34 お子さんが何を要求しているかわかりますか

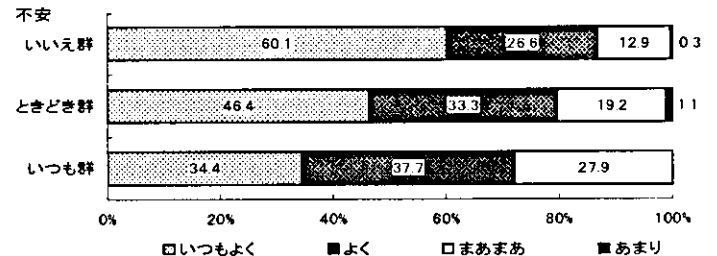


図-40 お母さんは赤ちゃんの世話をしたり遊ぶとき、話しかけますか

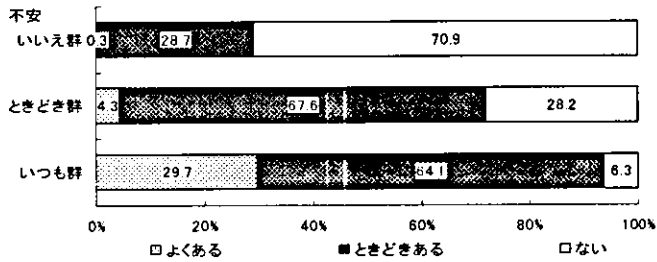


図-35 お子さんにどうかわつたらいいか迷う時がありますか

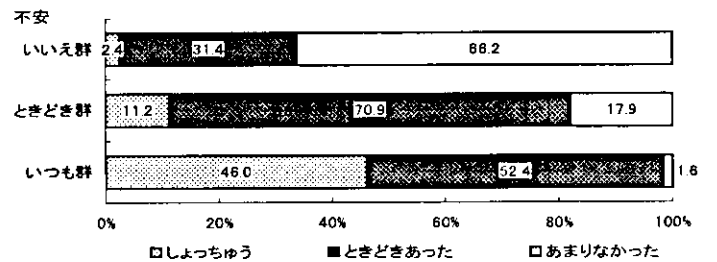


図-41 育児のことで今まで心配なことがありましたか

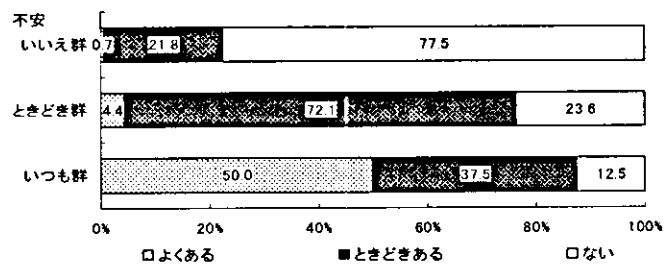


図-36 育児に自信がもてない、と感じることがありますか

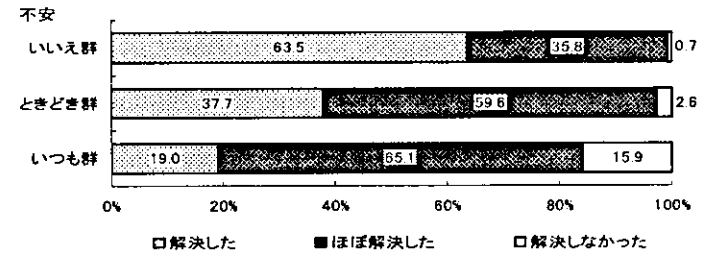


図-42 子育ての心配はそのつど解決しましたか

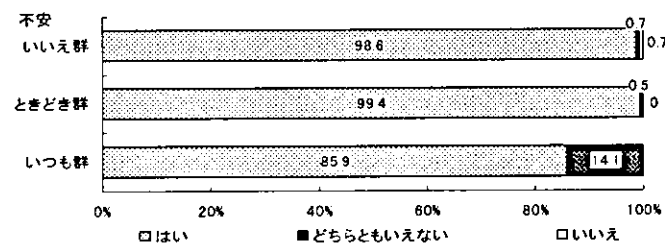


図-37 お子さんをかわいと思いますか

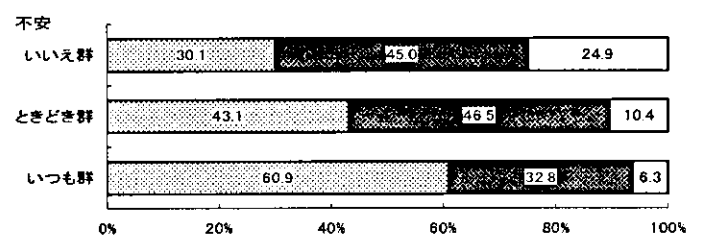


図-43 他の方のほかに育児をほかに心配なことがありますか

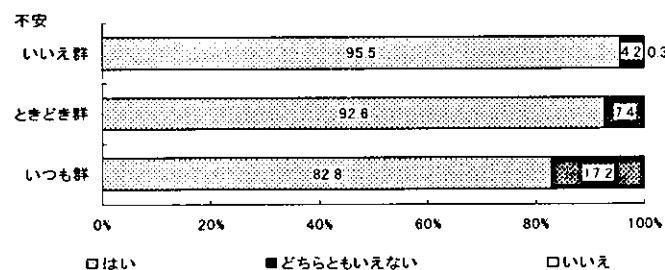


図-38 お子さんと一緒にいると楽しいですか

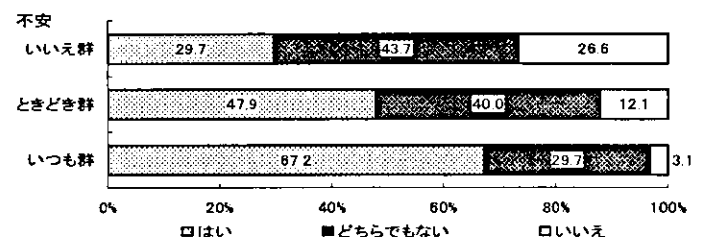


図-44 あなたが育児について努力しているのをほめて欲しいと思うことがありますか

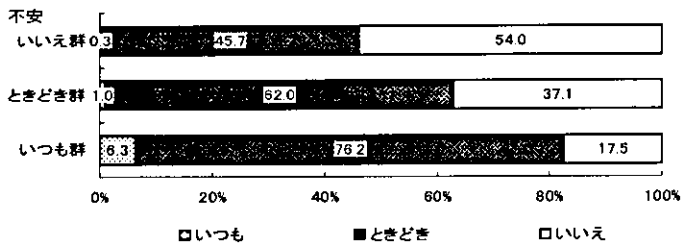


図-44 お子さんが同じことをしているのに、あるときは叱り、あるときは見逃したりしますか

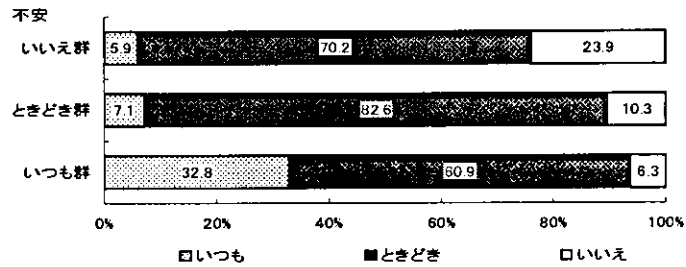


図-45 あなたはお子さんがしていることを黙ってみていられなくて、口出しますか

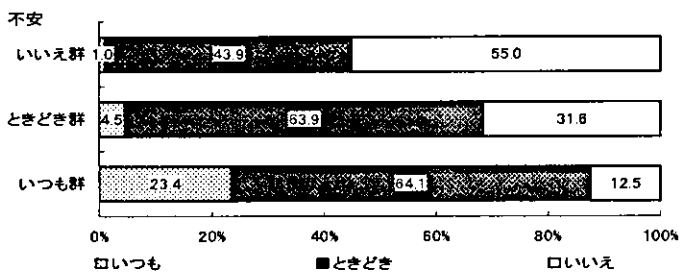


図-46 お子さんをよそのお子さんと比較して見ることが多いですか

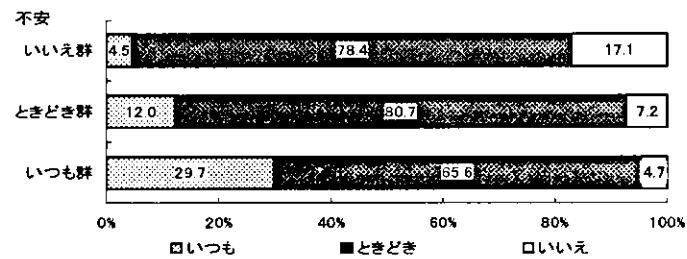


図-47 あなたはお子さんがしていることを「あれはいいけない」「これはいけない」と禁止しますか

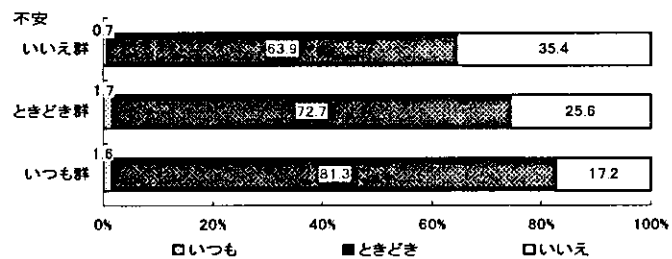


図-48 あなたはお子さんを叱るとき、たたく、つねる、けるなどの体罰を用いますか

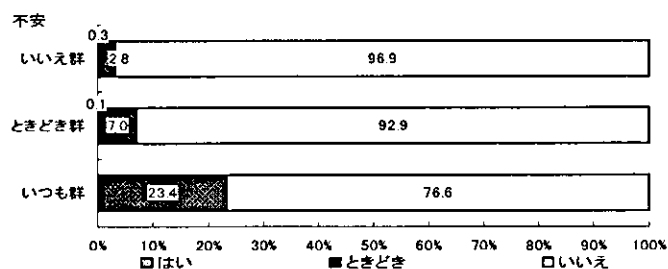


図-49 このお子さんとはなんとなく気があわないように思いますか

引用文献

- 1) 服部祥子・原田正文 乳幼児の心身発達と環境 名古屋大学出版会 1991
- 2) 原田正文 児童虐待発生要因の構造分析と地域における効果的予防方法の開発  
服部祥子 平成 15 年度厚生労働科学研究報告書 2003 Pp484-525
- 3) 早川 淳 母子相談の事例から 畠中宗一 現代のエスプリー母子臨床再考一 至文堂 2002
- 4) 福祉新聞 2004.8.16.
- 5) 村井則子 母親の心理学一母親の個性・感情・態度一 東北大学出版会 2002

## 子育て期母親の就労状況と育児不安要因の現状分析に関する一考察」

研究協力者 中川千恵美 大阪人間科学大学

### 研究要旨

昨年度原田班における「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態に関する調査」研究報告において、先行研究である大阪レポートとの詳細な比較研究を通して、20年経過した子育て現場や親子関係の変容についての、重要な提言がなされた<sup>(1)</sup>。

本研究は上記研究提言を踏まえて、育児環境における母親が置かれた状況について、第2次調査結果を踏まえつつ、特に母親の就労状況も加えて整理を行った。そして1980年代大阪レポートで今後の子育てにおける警鐘とされた「“育児不安と母性性の危機”である」との指摘から、育児不安についても報告した。

特にその育児不安と強くつながる育児のいらいら感に着目した。本研究では母親の育児にいらいらする事をもたらし、関連する要因として、経済状況・父親の協力・近隣との関係・育児上のモデルとなる人の存在・そしてイメージしていた育児と実際の育児等が違う等が挙げられる。そして、育児期に就労する母親・父親への両立支援の重要性と育児不安を助長や軽減についての分析に関する考察を述べた。

### A 研究目的

本研究は、「児童虐待発生要因の解明の要因と児童虐待への地域における予防的支援方法の開発に関する研究」というテーマのもと、3年目の原田班調査研究に関連する研究を実施した。

特に本研究では、「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態に関する調査」の第2次調査結果を踏まえ、先行研究大阪レポートから20年経過した2004年現在における、0歳から3歳児という乳幼児の子育て最中である母親の状況を検討した。子育て期における母親の就労状況も取り上げ、母親の育児不安に強く関連する育児のいらいらに注目し、その要因を中心に検討し、考察研究を実施した。

### B 研究方法

兵庫県姫路市において、「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態などに関する調査」を実施した。前年度原田班研究報告<sup>(1)</sup>と同様の、4ヶ月・10ヶ月・1歳半・3歳児を育てている保護者が対象となった。

今回の2次調査方法の天候恬としては、4ヶ月児と10ヶ月児においても、回収率などの点から、直接医療機関で受け取る事とした。他の点は、前年度の報告書と同様の手続きで実施した。

### C 本研究結果と考察

#### 1. 母親を取り巻く社会情勢

2004年時に実施した本調査に回答してくれた母親の年齢層は、25歳代から34歳代までが、7割を占めている。現在母親となった彼女達は、1970年代から80年代以降に生まれ育った訳である。

当時の社会環境は、戦後世界に類を見ない、経済発展・成長を成し得て、物質的な豊かさを享受してきた時代と言える。一方で、自然環境問題や、経済発展に伴う都市化社会を形成し、その都市への人口集中により核家族化が進行し、女性の社会進出が生じてきた。こうした社会構造の変化は、現代の家族員数の減少をはじめとし、家庭の養育機能の低下が問題視され、改めて家族や地域社会の在り方が見直され



てきた。

## 2. 本調査母親に関する概要

### ①母親の年齢

本調査では、対象となった母親の年齢は、25歳～34歳迄でほぼ7割強を占めている。20年前の大阪レポート母親の年代が占める割合は同じであるが、内訳が変化していた。当時は25歳から29歳が5割以上で、30～34歳が2割であったが、今回の調査では、30～34歳代が4割以上を占め、母親の年齢が高くなっている。少なからず女性の晩婚化を反映していると言えるのではないかと。

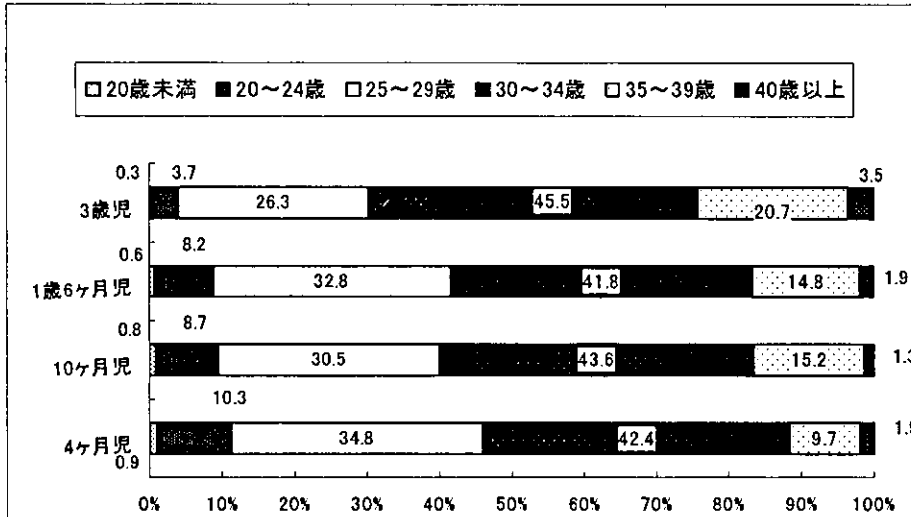


図1 母親の年齢

### ②母親を取り巻く環境

#### ②-1 家族構成

各年齢において8割が夫婦と子どもだけの家庭つまり核家族の定着が理解できる。加えて、3歳児では、その他5%の中に約半数が母子家庭と明記されていた。今後の家族構成の推移として注目しておく必要があると考える。

#### ②-2 父親の状況

父親の育児参加については、子どもの年齢に別には以下の結果になっている。

表1 お父さんは育児に協力的ですか

	4ヶ月児	10ヶ月児	1歳6ヶ月児	3歳児
はい	78.4	75.7	72.4	71.3
どちらともいえない	18.2	21.2	22.8	24.6
いいえ	3.3	3.1	4.8	4.1

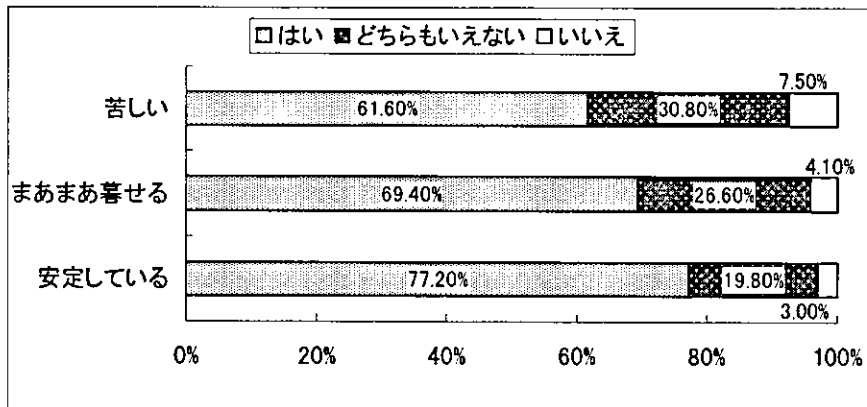
表2 育児について夫婦でよく話し合いますか

	4ヶ月児	10ヶ月児	1歳6ヶ月児	3歳児
はい	62.5	58	54.3	52.1
どちらともいえない	32.1	38	40.3	42.6
いいえ	5.4	4.1	5.4	5.3

この様に昨年度の報告同様、父親の育児に協力し、夫婦で話し合っって子育てに取り組んでいる、と捕らえる母親は、大阪レポート当時よりも約倍近くに増加している。

確かに父親の協力は、夫婦の役割分担や男性による子育て支援の啓蒙等から浸透してきたと言える。ただ昨年の報告にある、「赤ちゃんや子どもを一方の親だけにまかせっきり」ととらえている母親の場合は、「父親は協力的ではなく、子どもとも遊ばず、育児の話し合いもせず」とは、統計上優位な差があった。母親にとっての育児負担をもたらす結果となっている事にも留意する必要がある。つまり父親がどの様に協力をしているかも重要である。

加えて父親の協力は当然の事ながら、経済状況とも統計的に優位に関連している。



つまり、図1にも示すように、経済状況が「安定している」と父親が「育児に協力的」である ( $P < .01$ )。

3歳では、「子どもと一緒に遊ぶ」「一緒にいるときの様子:喜んで傍に行く」「育児について夫婦で話し合う」

図2 3歳児 経済状況と父親は育児に協力的ですか

全ての月齢で、経済的な状況との統計的有意差があった。やはり、生活に追われ、苦しい状況であると、仕事に追われ自宅にいる時間も物理的に少なく、また精神的にも余裕がなく、育児への協力や子どもとの関わりが低くなるのであろう。

## ②-3 近所の話し相手や子育て仲間の状況

前項の父親の状況表 結果を踏まえ興味深い結果が現れている。子どもの月齢増加につれて、父親の協力や育児の話し相手としての比率が、減少している。

表3 近所の世間話しや赤ちゃんの話し相手の有無

	4ヶ月児	10ヶ月児	1歳6ヶ月児	3歳児
数名いる	34.6	42.6	43.8	50.2
1~2名いる	35.7	32.8	36.6	33.8
いない	29.7	24.6	19.7	1.6

表3に見られるように、「近隣での子どもの事も含めた話し相手の存在」や「親子で一緒に遊ぶ仲間の有無」は、子どもの年齢と共に増加している傾向と好対照であると言える。母親にとって、子どもの成長に伴い、子どもの友達同様に、近所や子育て仲間の存在が重視されていると考える。

## 3. 母親の就労状況について

女性の子どもが3歳までの母親の場合、就労率は大阪レポート当時とさほど変化はない。

子どもの月齢とともに急上昇しているが、乳幼児がいて働いている母親は、4ヶ月児で13%弱、10ヶ月児で16%弱、1歳6か月児の母親で急増加し26%程度、3歳児の母親は33%である。

母親の就労との関連項目について

この就労と関連した項目では、以下の内容があった。

4ヶ月児においては、就労別での顕著な差は見られなかった。それ以外の月齢では、母親の就労形態と、

クロス集計実施し以下の点で統計的に有意な差があった。

①経済状態について

まず経済状態である。以下の結果となっている。概ね 10 ヶ月児、3 歳も同様な傾向である。ここで注目しておきたい点は、フルタイムで働く場合と仕事をしていない場合でははっきりとした経済状態の差があると

表4 1歳半 母親就労形態別と経済状態

	安定している	まあまあ暮せ	苦しい
フルタイム	51.50%	41.70%	6.80%
パート	24.80%	54.00%	21.20%
自営	44.00%	36.00%	20.00%
内職	13.60%	40.90%	45.50%
仕事をしていない	38.70%	47.10%	14.10%

言える。パートや内職といった就労形態では、現状必ずしも経済的に安定しているとはいきれない。

②乳幼児との関わりや地域での関係性について

ここでは、当然であるが 1 歳半・3 歳では「子どもに話しかける時間」や「遊びや散歩に出かける時間」、「親子で過ごす子育て仲間」や「育児サークルへの参加」において、就労する母親と仕事をしていない場合とで明らかな差があった。

ただ子どもの遊び友達：つまり「お子さんと一緒に遊ぶ同年代の友達がありますか」において、1歳半のみ、「数名いる」と答えた者がフルタイムで 53%あり、パート：43.40%、自営：50.00%、内職：45.50%、仕事をしていない：36.80%であった。これはフルタイムを始めとした就労者の場合、保育所を利用しており、そこでの同世代の子どもの友達ができたと考えられる。

0 歳児の頃は、親子で過ごす時間が中心になりがちだが、1 歳を過ぎると、外出する事が多くなる 1 歳過ぎから、子どもにとっての友達づくりのニーズが出てくる。少子社会が進行している現在、子どもの友人が必要とされるこの時期、地域で同世代の友人を見つける難しさがあると言える。3 歳児になると、こうした差がなくなっているのは、この間に親子で遊ぶ仲間が地域で出来てきたといえる。

③他者評価について

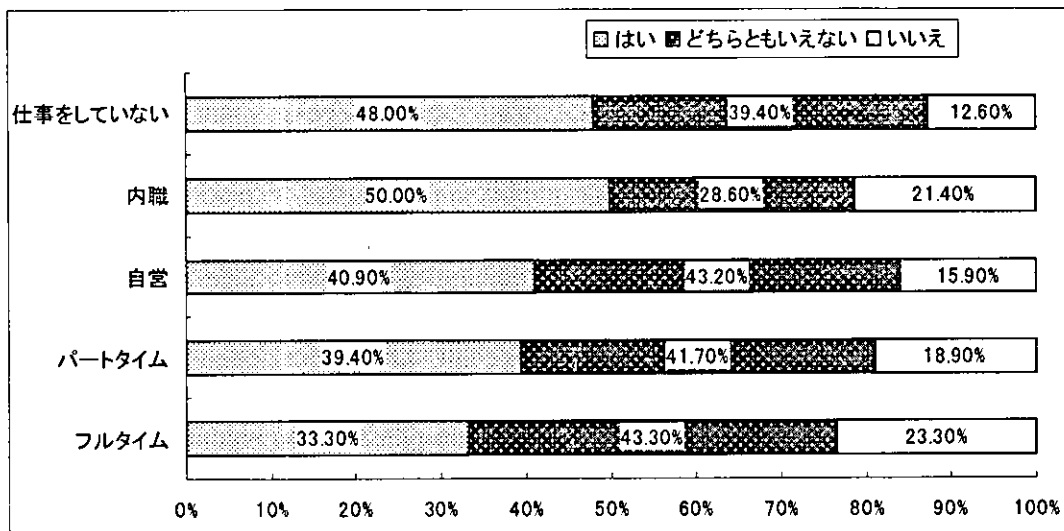


図3 3歳就労別と育児についての努力をほめてほしいと思う事がありますか \*P<.05

3歳児になり、毎日の育児に対する努力を認めてもらう事への必要性が、仕事をしていない母親の方が、強く持っていた事が示されている。

#### ④社会資源や支援サービスへの着目

子どもの年齢に関わらず、就職している母親の方が、「ファミリーサポート、子育て短期支援利用事業、乳幼児健康支援ディサービス事業」の会員になっている、知っている等が多かった。就労する母の市内の保育に関する社会資源や支援サービスへの関心は、日中の保育に対する差し迫った就労する母親の両立支援に対する保育ニーズの現われであると言える。

#### ⑤就労別と父親の協力

就労している事と父親の協力は、本調査では統計的な有意差は見られなかった。これは、やはり就労している比率がまだ多くはないことと、経済状況によっても父親の協力は影響を受けるのであろうし、就労する多くの母親に育児と家事・仕事の両立の必要性が求められていると言えよう。

### 4. 育児不安について

#### ①育児でいらいらする事を重視する理由

昨年度の報告にも整理されたが、「育児でいらいらする事は多いですか」には、子どもの年齢が4ヶ月児では1割ほどの母親が「はい」と答えたが、1歳半・3歳児の母親とそれぞれ比較すると、3倍・4倍近くに上昇している。

こうした「育児でいらいらする事が多い」と、「子どもに話しかける・遊んだり散歩する時間・外で遊ばせる」等が減少している。つまり母親の具体的な育児行動に影響を及ぼしていると言える。また子どもが何を要求しているのかわからない・子どもにどうかかわっていいのかわからない・育児に自信を持ってない・子育てを大変と感じる・育児で不安になる等に関する育児不安に関する項目と強く関連があった。加えて育児でいらいらする事が多いと育児に関する評価が気になり、努力をほめてほしいと思う事にも関連があった。

#### ②育児でいらいらする事に関連する内容について

そこで本研究では、「育児でいらいらすること」着目し、いらいらを助長するまたは軽減する事に関連ある内容でクロス集計を実施し統計的に有意差が出た項目結果を、ピックアップする。なお本調査結果を踏まえて、子育てにおける育児負担感をもたらす要因やその対応については、考察で検討する。

#### ② -1 育児のいらいらする事と経済状況について

これは各月齢を通して、優位な関連がなかった。10ヶ月児において、経済的状況が苦しい場合とのクロス集計でいらいらする事が多いに「はい」とした%は、「いいえ」とした人の倍で統計的にも有意であった。経済的な厳しさも育児のいらいらを助長する要因に関係しているとも言える。

#### ② -2 育児のいらいらする事と父親との関連

父親が育児に協力する事との関連では、1歳半のクロス集計で以下の結果となった。

表5 1歳半育児でいろいろすることが多いですかとお父さんは育児に協力的ですか

		お父さんは育児に協力的ですか		
		はい	どちらともいえない	いいえ
育児でいろいろすることが多いですか	はい	67.60%	26.50%	5.90%
	どちらともいえない	74.10%	22.50%	3.50%
	いいえ	76.80%	16.80%	6.30%

( $P < .05$ )

さらに「育児について夫婦でよく話し合いますか」4ヶ月児と3歳で育児のいろいろとの関連が見られた。

表6 4ヶ月・3歳児 育児でいろいろすることが多いですかと育児について夫婦でよく話す

			夫婦でよく話す		
			はい	ときどき	いいえ
4ヶ月児	育児でいろいろすることが多いですか	はい	51.10%	35.10%	13.80%
		どちらともいえない	57.20%	39.20%	3.60%
		いいえ	69.70%	25.20%	5.10%
3歳	育児でいろいろすることが多いですか	はい	45.80%	47.70%	6.50%
		どちらともいえない	53.50%	41.90%	4.50%
		いいえ	67.60%	27.90%	4.40%

これらの表の結果から、父親の協力が得られている事や育児について夫婦でよく話し合う事は、育児のいろいろすることが多いですかに対し、「いいえ」が多くなり、いろいろの軽減に関連あると言える。

### ②-3 近隣との関係性

ここでは、4ヶ月・10ヶ月児では、「育児でイライラする事は多いですかと育児や家庭のことで他の人とおしゃべりするの好きですか」はそれぞれクロス集計で関連があることが示された。つまり、母親側の要因とも言える、話しをする事が好きといった自己開示的な要因が、育児のいろいろを多くさせない事に関連している、と言える。

また親子ともに外出や友達作りが始まっていく時期である、1歳半では、「世間話やお子さんのことの話し相手がありますか」が育児のいろいろを多くしない事に関連があることが、以下の表でわかる。

表7 育児のいろいろが多いですかと世間話やお子さんのことの話し相手がありますか

	数名いる	1~2名いる	いない
はい	38.20%	39.80%	22.00%
どちらともいえない	44.00%	35.90%	20.10%
いいえ	52.30%	33.20%	14.50%

### ② -4 育児のいろいろと育児をする上でモデルとなる人の存在

育児のいろいろと育児をする上でモデルとなる人の有無は、育児のいろいろと全年齢で関連していた。つまり、育児のモデルがある人は、育児でいろいろすることが多くないと言う事

である。

表8 育児でモデルとなる人はいますか

		いる	いない
4ヶ月	はい	54.00%	46.00%
	どちらともいえない	58.60%	41.40%
	いいえ	63.40%	36.60%
10ヶ月	はい	45.50%	54.50%
	どちらともいえない	56.30%	43.70%
	いいえ	63.60%	36.40%
1歳半	はい	49.20%	50.80%
	どちらともいえない	55.10%	44.90%
	いいえ	66.30%	33.70%
3歳	はい	45.80%	54.20%
	どちらともいえない	55.30%	44.70%
	いいえ	50.00%	50.00%

具体的なモデルとしては、複数選択可となっているが、選択率は、両親・友人・兄弟姉妹の順であった。これは、大阪レポート当時の親戚が減少し、友人が増加してきている。

やはり近くの他人ではあるが、友人や子育て仲間の存在が身近な育児のお手本となっているのである。

②—5「子どもを持つ前にイメージをしていた育児と実際の育児との違いについて

これは、10ヶ月児・1歳半・3歳で育児のいらいらとの関連があった。

表9 育児のいらいらがおおくありますかと子どもを

持つ前にイメージをしていた育児と実際の育児との違い

		大いにあった	少しあった	なかった
10ヶ月	はい	54.60%	37.40%	8.00%
	どちらともいえない	29.90%	55.50%	14.60%
	いいえ	30.20%	46.20%	23.60%
1歳半	はい	56.80%	34.00%	9.30%
	どちらともいえない	33.60%	51.80%	14.60%
	いいえ	29.00%	49.20%	21.80%
3歳	はい	52.00%	46.70%	16.30%
	どちらともいえない	35.20%	47.10%	9.70%
	いいえ	19.90%	30.00%	16.70%

イメージしていた育児と実際の育児の違いが大いにあると、育児のいらいらが多くなりやすい事が、表に示されている。

10ヶ月と1歳半では、違いがないと、いらいらは多くない事と言えよう。

③イメージしていた育児と実際の育児の違いについて

この要素は、どういった項目と関連があるのか、さらに検討してみた。

すると、4ヶ月児と10ヶ月児・3歳児の場合、「自分の子どもが生まれるまでに、他の小さい子どもを抱いたり、遊ばせたりした経験」「他の子を自分の子どもが生まれるまでにべさせたりおむつをかえた経験」があるほど、実際の育児との違いがなかったとしていた。つまり母親自身の育ちにおける乳幼児との交流経験が関連していた。

表10 10ヶ月児イメージしていた育児と実際の育児との違い

と他の子どもを食べさせたりおむつをかえた経験

表11 3歳児イメージしていた育児と実際の育児との違い

他の小さい子どもを抱いたり、遊ばせたりした経験

	よくあった	ときどきあった	なかった		よくあった	ときどきあった	いいえ
大いにあった	16.10%	21.10%	62.80%	大いにあった	28.50%	37.70%	33.80%
どちらともいえない	20.20%	27.90%	51.90%	どちらともいえない	31.70%	44.20%	24.10%
なかった	32.40%	22.30%	45.30%	なかった	44.30%	32.30%	23.40%

さらに1歳半と3歳児では、イメージしていた育児と実際の育児の違いはなかったに、育児について夫婦でよく話しあう事がある事が関連していた。よく話し合う方が、違いがなかったと大いにあったとに、

こうした乳幼児との交流と夫婦間の話し合いが育児のずれを修正する事に関与し、それが育児のいらいらの減少に関連していると考える。

### 3. 考察

#### ① 母親の就労との両立支援について

##### ①-1 母親の就労状況について

今回の調査では、3歳までの就労している母親は、4ヶ月児の1割から3歳児の3割弱であった。

本年3月発表された厚生労働省の04年版「働く女性の実情」(女性労働白書)(2)によると、政令指定市や東京23区など都市部ほど、幼い子どものいる世帯で母親が働いている割合が低いことが明らかになった。02年の総務省の就業構造基本調査をもとに分析した。それによると、末っ子が6歳未満の核家族世帯で妻が働いている割合の全国平均は33.7%であった。

国立社会保障・人口問題研究所「第十二回出生動向基本調査(夫婦調査)」(平成十四年)によると、結婚前就業していた妻について、結婚五年未満で子を持ちながら就業するケースは全体の二割弱で、正規雇用に限ると約一割となっている。また、結婚五年未満で子を持つ妻の就業状態は専業主婦が格段に高く、子が小さいうちは就業を継続せず専業主婦となっているケースが多いと推測される。

##### ①-2 就労する母親の育児負担

「男女共同参画白書平成16年版」(3)において、以下の調査報告は、乳幼児を持つ家庭の傾向を的確に描き出している。つまり多くの女性は、結婚や出産後、仕事をどうするかについての選択を迫られることが多い。つまり意識面では「子どもができてみずっと職業を続けるのがよい」という方向へ変化してきているものの、現実には仕事と子育ての両立が困難であることが調査からうかがえる。

また同年調査の「子育てのつらさ」においては、女性が総数や男性より、高く意識していた項目「自分の自由な時間がなくなる、子どもの相手には体力と根気がいる、自分が思ったように働けない、子育ての大変さを配偶者や周りにわかってもらえない」であった。

##### ①-3 父親の就業との関連

出産・子育ての仕事への影響は女性に偏っており、男性の育児休業取得率も極めて低い。母親の就業状態にかかわらず育児の負担は母親に偏っており、「散歩など屋外に連れていく、家の中で相手をする、寝かしつける、入浴させる、おむつを取り換える、食事の世話をする」等、父親の育児参加の程度は、妻がどんな就業状態であっても余り大きな差はない。男性の就業時間は減少しているが、男性の家事・育児にかかる時間は少ない状態が続いている。

「第2回21世紀出生児縦断調査」により、母親の就業状況別にふだんの保育者が誰であるかをみると、「母」は母親が無職の場合は99.6%、母親が就業している場合も86.2%と高くなっている。また、母親の就業状況別に、父親の「散歩など屋外に連れていく、家の中で相手をする、寝かしつける、入浴させる、おむつを取り換える、食事の世話をする」等の家事・育児参加程度は、母親が有職時の方が家事・育児を行う父親が若干多くなっている場合がほとんどであるが、母親が無職の時と余り大きな差はない。

育児期の男性年齢である30歳代就業時間は、週60時間以上働くなど最も長く、当然男性の育児休業取得率も極めて低い。出産・子育ての仕事への影響は女性に偏っており、改めて性が就業時間

を調整することにより子育てを行っている状況がうかがえる。

このように、男性が育児・家事にかかる時間は少ない状態が続いており、妻が働いているかいないかによる差も余りない。全体的に就業時間が短くなってきているにもかかわらず、男性の育児・家事への参加が少ないのは、男性の就業時間だけの問題に加え、家庭における男女の役割分担の在り方にも要因がある、と白書では指摘している。つまり「育児や家事は、女性の仕事」という役割分担意識は、男性を中心にまだ多く存在し、総理府が実施した「親子の接触時間」の調査等においても、実際に子どもと過ごす時間も、父親は母親に比べて少なくなっています。こうした役割分担意識在り方を、各家庭にいて検討する事が大切である。

#### ①-4 両立支援について

今後さらに保育所においても就労支援として、多様な保育ニーズに対応していく特別保育の充実をはかるとともに、また本調査で取り上げていた、ファミリーサポートの普及や病児保育、などのサービスの利用者への周知と利用枠の拡大も必要になるであろう。

加えて、本年3月施行された次世代育成支援行動計画でも策定されている、企業サイドの育児支援への参加の充実実施が必要となつてきている。まさに育児や介護を行いやすい労働環境の整備を行い、ファミリー・フレンドリー企業の周知と社会的な表彰の定着が待たれる。

#### ②育児不安の助長・軽減要因について

大正大学 中村は自身の研究において(4)(5)「昨今、一般の子育て家庭の孤立化と子育て技術の低下は深刻な状態にあり、子育てを社会全体で支える仕組みづくりが重要課題と認識されている。」との問題意識から、子育て不安を規定する要因を共分散構造分析により解析した結果を2つの調査モデルから、以下の5つの要因を提示した

その研究考察において、全体の約60%の母親が何らかの子育て不安があるとしていたが、子育て不安を規定する因子は、(1)父親の育児サポート(2)他の子どもの親との人間関係のストレス(3)子育て支援サービスの利用(保育サービスの影響が大きい)(4)獲得している地域の子育て関連情報の量(5)母親のゆとりなどであった。

中村の研究と同様な要因が、今回の本研究における育児不安に寄与する「育児でいらいらすることが多い」との関連項目となっている。つまり「父親の協力」や「夫婦で育児の事を良く話し合う」は、父親の育児への関わりであり、育児のサポートと考えられる。

次に、中村が指摘する他児の親との人間関係上のストレスの有無等質的な関連は、今回の研究では、明確に出来ない。しかし今回の「近所にふだん世間話や赤ちゃん(お子さん)の事を話したりする人がいますか」「親子で過ごす育児仲間がいますか」などは、ある意味近隣との人間関係性の有無が育児のいらいらの軽減に関連すると考えられる。

さらに本研究から、育児のいらいらの軽減に「育児モデル」が存在することの重要性、そのモデルが、実母や兄弟姉妹は当然だが、友人を認知しているのは、身近な存在で母親同士が同じ価値観や行動傾向を持つ友人との人間関係を自身の指標にしているとも言えるのではないか。

「イメージしていた子育てと実際の子育ての違い」に育ちの中での乳幼児の経験が関連する事は、少子社会が進行する中で、小学校における赤ちゃんとの交流活動、中学校での保育所への訪問等各地の取り組みにおける教育活動の継続が重要であると考えられる。



おわりに

本研究から母親の動向の一端を現状分析したが、さらにこの結果を踏まえ、より育児不安軽減に寄与する要因とその支援との関連を同定していき、虐待予防に関する研究を積み重ねていく必要があると考えます。

本調査研究実施に際して、趣旨を理解し協力いただいたH市保健所の皆さんに感謝したい。

文献

- (1)原田正文、山野則子、中川千恵美、橋本真紀、服部祥子他、『児童虐待発生要因の解明と児童虐待の地域における予防的支援方法に関する研究』（平成15年度、厚生労働科学研究（こども家庭総合研究事業）報告書、2004年4月、pp.484-525）
- (2)女性の労働白書 平成14年度版
- (3)男女共同参画白書 平成16年度版
- (4)中村 敬、堀内 勁、星 且二：「地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究」（2002年度厚生労働科学研究子ども家庭総合研究事業）報告書、2003年3月
- (5)中村 敬、堀内 勁、星 且二：「地域における子育て支援ネットワーク構築に関する研究」（2003年度厚生労働科学研究子ども家庭総合研究事業）報告書、2004年3月

児童虐待発生要因の解明と児童虐待への  
地域における予防的支援方法の開発に関する研究  
(研究協力者報告書)

育児負担感と不適切な養育の関連に関する構造分析

研究協力者 山野則子 梅花女子大学

研究要旨

本報告は、「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態などに関する調査」の第 3 次調査として実施したものである。先行研究において育児負担感は、特性的自己効力感やソーシャルサポートと関連があるということが言われてきた。それらの関連と不適切な養育との関係のモデルを作成することで不適切な養育の予防を検討することを目的に取り組んだ。調査は、4ヶ月、10ヶ月、1歳半、3歳の健診時に、ほとんど既存の尺度を用いた調査票において実施した。分析方法は、共分散構造分析によって仮説としたモデルを検証したものと共分散構造分析になじまなかった子育て状況の項目については、t検定、一元配置分散分析において検討した。結果、『育児負担感は、不適切な養育に大きな影響を与えており、その軽減には、ソーシャルサポートでも手段的サポートが有益である』という結果であった。 $\chi^2$ 値は、733.155 (df=201, p=0.000) で、適合度指標は GFI0.952、CFI0.946、RMSEA0.044 と十分な適合度を示すモデルが得られた。

また、子育て状況と育児負担感の関連、子どもの年齢、初産・経産婦の違いによって育児負担感、仕事、経済状況、孤立、発達はそれぞれ関連があることが確認できた。

**Key Words** : 育児負担感、不適切な養育、ソーシャルサポート、特性的自己効力感

A. 研究目的

本報告は、「子育て中の親の悩みやニーズ、子育て実態などに関する調査」の第 3 次調査として以下の目的で行った調査の報告、分析を行う。

本研究は、先行研究において論じられてきた育児負担感（中嶋，1999；川井，1998，1999，2000）やソーシャルサポート、特性的自己効力感などの要因の関係（金岡，2002；藤田，2002）をデータに基づいて構造を明らかにすること、これらの要因と不適切な養育との関連も明らかにする。また、社会的に注目されてきている子育てサークルや母親自身の子どもの頃の育児体験、子育て仲間、早期教育、仕事などの関係も明らかにすることによって児童虐待の予防的支援方法について考察する。

B. 研究方法

(1) 調査対象と収集方法

今までに行ってきた一連の調査の一環として、姫路市の全面的協力によって、第三次調査と位置づけて実現したものである。4ヶ月児健診、10ヶ月児健診は医療機関において、1歳半健診、3歳児健診は保健所および2か所の保健センターにおいて実施しているが、健診の案内とともに郵送し、健診時に回収をするという方法を取った。

回収されたデータのうち、多変量解析に採用するために欠損値を除外し、3歳 1344人、1歳半 1200人、10ヶ月 959人、4ヶ月 864人分のデータを分析対象にする。

## (2) 調査項目

本調査の質問紙は、個人および家族の基本属性に関する質問、子育て仲間や子育てサークルへの加入など子育て状況に関する質問等の部分と以下の心理的尺度を利用したものから構成されている。すべての項目において、実施現場との調整により表現の問題等から、以下のような変更を加えた。

### ①育児負担感尺度

中嶋ら(1999)の育児負担感尺度において、共通性が0.3以上であったと報告されている項目12項目のうち、「活動制限認知」6項目のうち5項目、「否定的感情認知」6項目のうち5項目から構成した。

### ②支援ネットワーク尺度

宗像(1982)により標準化されている「支援ネットワーク」の「情緒的支援ネットワーク」「手段的支援ネットワーク」の項目を田中ら(2002)の項目も参考にこの年齢の子どもをもつ親への質問に対応するように変更したもの15項目を作成した。最終的に3項目削除となり12項目で構成した。

### ③特性的自己効力感尺度

成田ら(1995)により妥当性が確認された尺度23項目から、実施現場からの要望で16項目に絞り込み、かつ表現をポジティブ表現に変更して使用した。

### ④不適切な養育

大原ら(2002)、妹尾(2002)が使用した虐待項目を参考に4項目選択して採用した。

## (3) 分析方法

### 1) 仮説に基づく育児負担感と不適切な養育のモデルの検証

『育児負担感は、不適切な養育に大きな影響を与えている。その軽減には、ソーシャルサポートや自己効力感が有益である。そして、個人的サポートでなく子育て仲間や子育てサークルなどの集団的サポートが有効な役割を果たす』という不適切な養育予防モデルの仮説を立てる。

この仮説を検証するためにモデルを作成し、検証を重ねる。

#### ①予備解析

すでに尺度化された項目についても、各尺度の確認的因子分析を行う。1因子であると予想された「不適切な養育」以外の因子分析は、最尤法、プロマックス回転を用い、共通性0.3以下のもの因子負荷量が0.3以下になるものについては除外する。「不適切な養育」については、主成分分析を行う。

#### ②共分散構造分析

その上で、各要因の関係性をモデル化する。

## 2) 子育て状況に関する項目と各因子の関連の検討

子育て状況に関する項目と因子分析の結果得られた各因子の関連を検討する。簡便法により、各因子を因子得点に換算し、育児困難感や不適切な養育と各因子の関係、そして、それぞれ各子育て状況の項目（子育て仲間、育児サークル、育児体験の有無、早期教育、仕事、経済状況）との関係を検討した。その際、t検定あるいは一元配置の分散分析によって検討を行った。また、初産婦、経産婦の違い、子どもの発達による違いについても比較検討を行った。

## C. 研究結果

### (1) 仮説に基づく育児負担感と不適切な養育の関連モデルの検証

各年齢で実行したが、モデルフィットのよかった3歳について報告する。

#### ①予備解析

育児負担感尺度は、各年齢とも「否定的感情認知」、「活動制限認知」という2因子構造であり、非常に高い因子負荷量であることが確認された(否定的感情認知:.715~.555, 活動制限認知:.918~.630)。同様に、支援ネットワーク尺度についても、「情緒的支援ネットワーク」、「手段的支援ネットワーク」という2因子構造であり、非常に高い因子負荷量であった(情緒的支援ネットワーク:.777~.646, 手段的支援ネットワーク:.825~.713)。特性的自己効力感尺度については、実行の段階で削除された項目が多く、既存の尺度として考えにくい状態になり、因子分析の結果からも、共通性(0.3未満のものが8項目)、因子負荷量あわせて低く、項目数がさらに少なくなった。2因子構造にまとまったが、既存の特性的自己効力感とは考えずに、本調査結果で出現した因子として検討することとした(「行動完了しようとする意思」「行動生起しようとする自信」)。不適切な養育は、主成分分析によって、1因子構造であることを確認した。

#### ②共分散構造分析による育児負担感と不適切な養育関連モデルの分析

すでに、述べてきたように育児負担感の「否定的感情認知」「活動制限認知」、支援ネットワークの「情緒的サポート」「手段的サポート」、特性的自己効力感に関連する「行動完了しようとする意思」「行動生起しようとする意思」、そして「不適切な養育」、これらの7因子の関係を明らかにする上で、本研究では共分散構造分析を用いる。共分散構造分析は、抽出した因子の妥当性と因子間関係の検証が同時に可能になるからである。

分析に先立ち、それぞれの因子において負荷量0.6以上あることを基本としながら、かつ最低3項目を保障できる形で観測変数とした(図1)。また、2次因子として育児負担感を考えたため、育児負担感を構成する2つの因子には、誤差相関を規定した。

分析結果は、図2に示すとおりであった。モデル全体を評価すると、 $\chi^2$ 値は、733.155 (df=201, p=0.000) で、適合度指標はGFI0.952、CFI0.946、RMSEA0.044といずれもモデルとデータが適合していることを示す良好な結果であった。